

就労世代の歯科健診の推進に関する検討
－継続受診による口腔保健状況の変化－

一般財団法人日本口腔保健協会

○中村瑞希 大関慧子 松木晴香 山田麻央 宇原由桂 水口洋子 児玉弓子

目 的

生涯を通じた歯科健診を推進する上で、法定健診がなく、かつ、多忙な就労世代に対する歯科健診の取組みが課題となっている。2024年度学術大会では、就労世代の歯科健診受診率を高めるための試みとして、2023年に某事業所で一般健康診断（以下、一般健診）と同時に歯科健診（ポイント指導含む）を実施し、受診者（256名）の結果について報告した。今回はその続報として、2024年に同一事業所の一般健診において継続して歯科健診を受けた者（継続受診者）の口腔保健状況について報告する。

対象および方法

【調査対象者】

2023年・2024年に、同一事業所で一般健診と同時に歯科健診を受診した継続受診者225名（男性211名、女性14名）を調査対象者とした。調査対象者の性別・年齢別の内訳は（表1）のとおりである。

倫理的配慮として、調査報告にあたり対象者には同意を得て行い、データの取扱い個人が特定されないよう匿名化した。

【調査項目および方法】

1. 歯および歯肉の状態

①歯の状態

全歯を視診により診査し、「未処置歯あり」の者を調べた。

②歯肉の状態

CPI代表歯法で診査し、診査基準に基づき以下のとおり分類した。
「健康」「歯肉炎」「歯周炎（歯周ポケット4mm以上）」

2. 歯口清掃習慣

直接本人から聞き取り記録した（以下の選択肢より1つを回答）。

①1日の歯みがき回数

「0回」「1回」「2回」「3回以上」

②歯間部清掃用具の使用状況

「週1回以上」「使用していない」

3. 歯科医院での定期健診

直接本人から聞き取り記録した（以下の選択肢より1つを回答）。
「1年に1回以上」「受けていない」

4. 実施後、任意でアンケートを実施

①歯科健診を受診した感想（以下の選択肢より1つを回答）
「満足」「普通」「不満」

②その他自由記入欄



表1 調査対象者の性別・年齢別の内訳(人数)

性別	実施人数	～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳～
男	211名	71名	26名	38名	59名	17名
女	14名	2名	0名	7名	5名	0名
計	225名	73名	26名	45名	64名	17名
年代別の割合		32.4%	11.6%	20.0%	28.4%	7.6%

【実施方法】

歯科医師による健診・口腔状況の結果説明後、歯科衛生士が定期健診の重要性と口腔内のセルフケアについてポイント指導を行った。

結果および考察

「未処置歯あり」の者は2023年に比べ、全体では4.4ポイント減少し、年代別では20歳代、50歳代、60歳代において減少した。

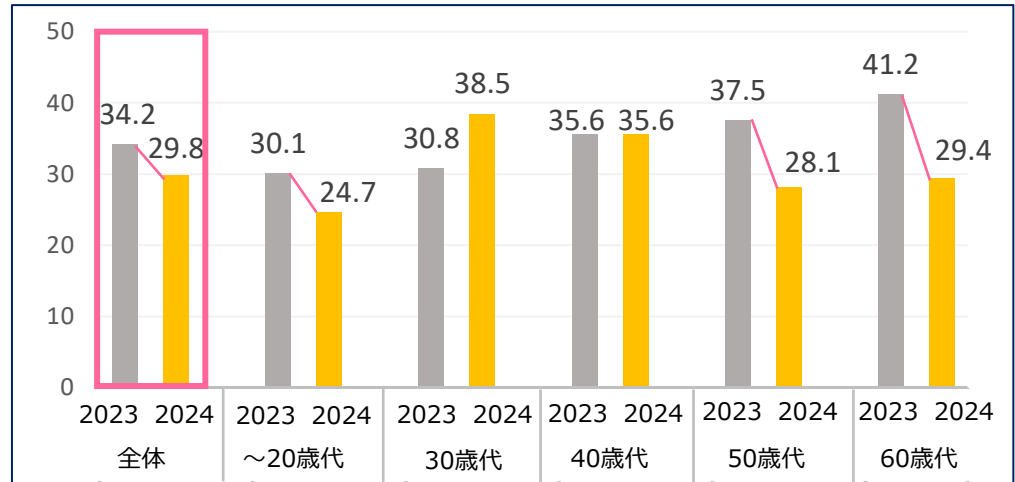


図1 「未処置歯あり」の者

「歯肉の状態」は2023年に比べ、歯周炎の者が全体では17.3ポイント減少し、全ての年代で減少が認められた。

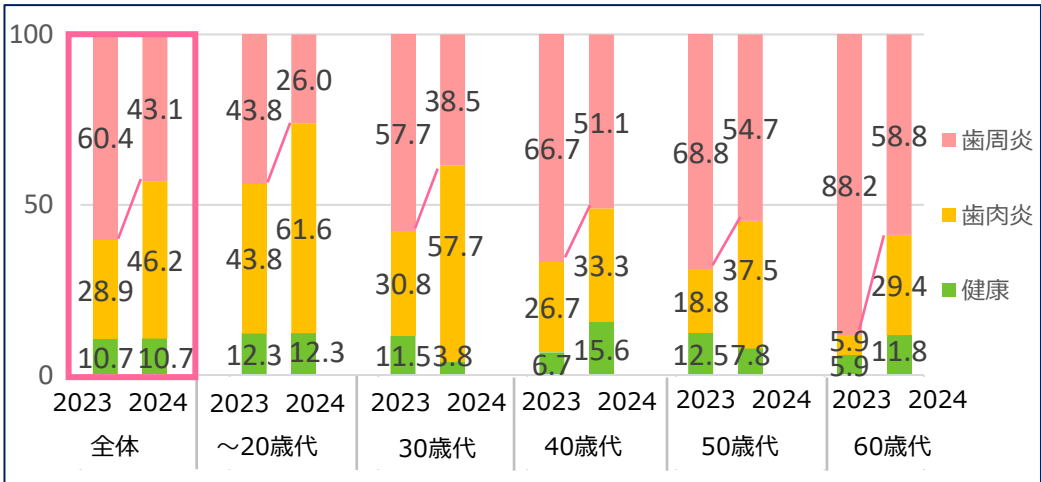


図2 歯肉の状態

「1日の歯みがき回数」は1日1回以下の者が減少し、2回以上の者が増加した。

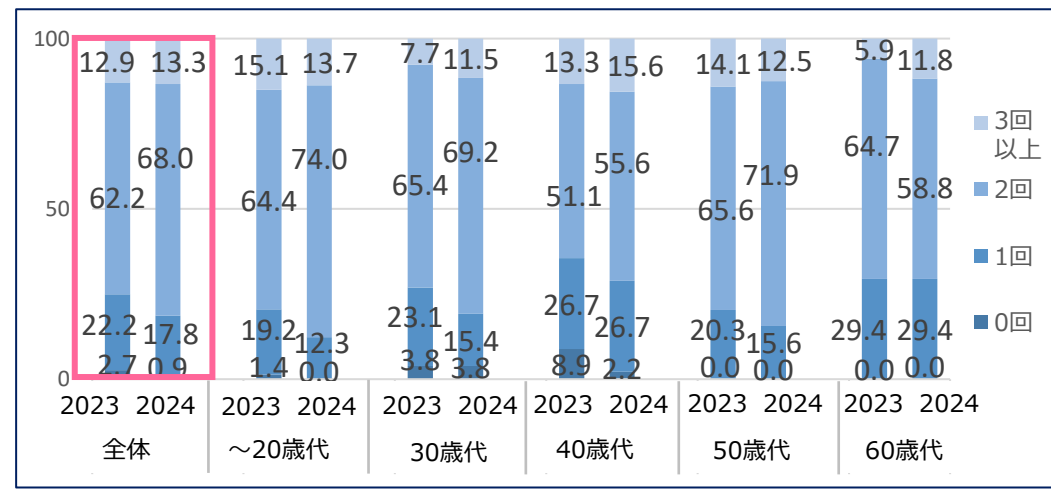


図3 1日の歯みがき回数

「歯間部清掃用具の使用状況」は各年代で増加し、特に20歳代において増加率が高いことが認められた。

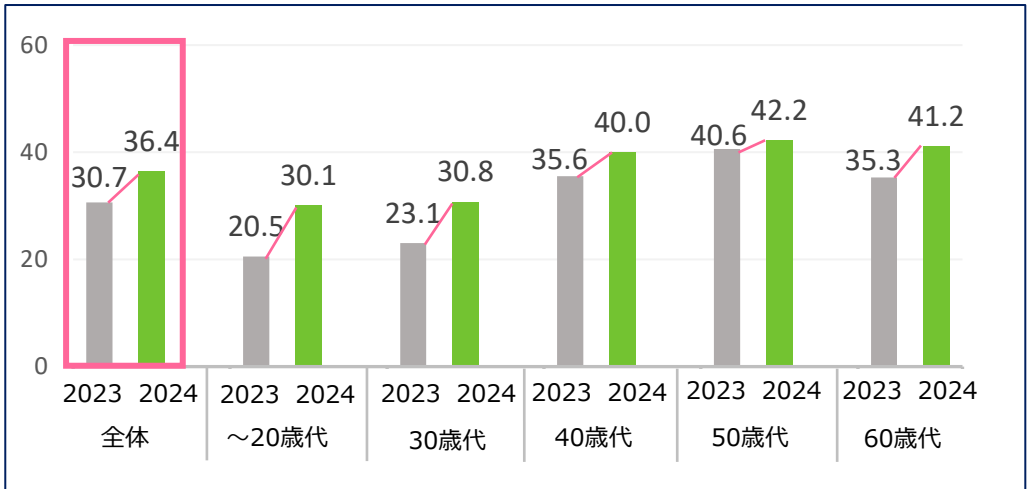


図4 歯間部清掃用具の使用状況（週1回以上）

「歯科医院での定期健診受診者」は20歳代が最も少なく、30歳代、50歳代でやや増加した。

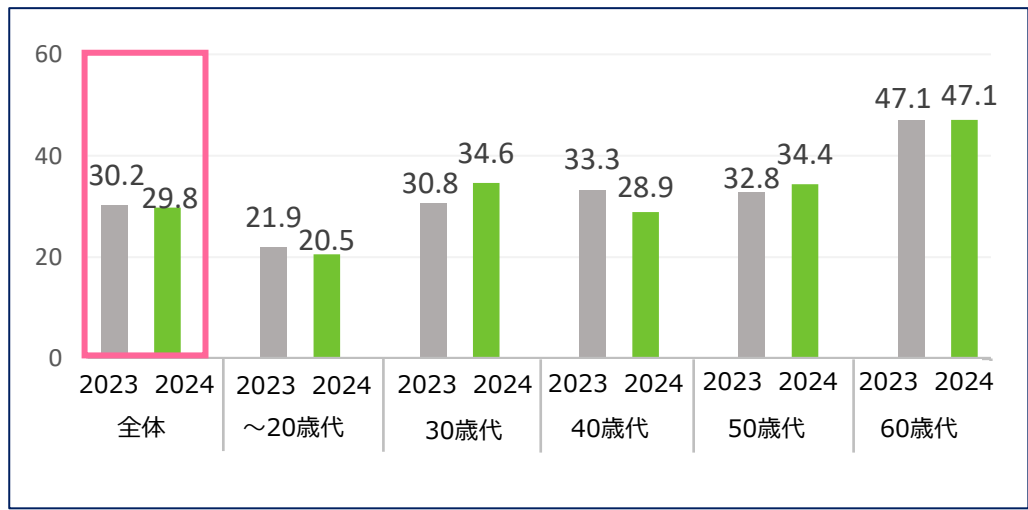
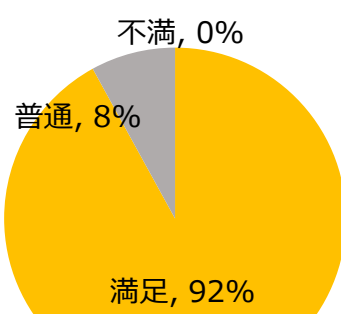


図5 歯科医院での定期健診の習慣（1年に1回以上）

「実施後アンケート」の結果

①歯科健診を受診した感想



②その他自由記入欄

- ・口の中の状況がわかった
- ・今後必要なことがわかった
- ・職場で短時間で受診できよかった等の声があげられた



図6 実施後アンケートの結果

結 論

今回の調査結果から、職場での定期的な歯科健診で自分の口腔状況を知り、行動変容や口腔保健状況の改善に繋がったことが認められ、**継続受診の重要性を確認することができた**。これらのことから、就労世代の歯科健診の推進には、**継続受診が容易となる一般健診との同時実施が有用である**ことが示唆された。